

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1988年

ポーランド月報

12月号
(通巻81号)
400円

円卓今なぜ円卓会議か——ワレサは語る

黙せる大衆の獲得のために——ヤツェク・クーロン



今なぜ円卓会議か——ワレサは語る

チャンスは見逃せなかった…………… 3
 より賢明なよりすぐれた「連帯」に…………… 4
 冒険主義に走ってはならない…………… 5
 なぜ私はこの決定を下したのか…………… 5
 「連帯」は要求する…………… 6

円卓会議は何を実現できるか…………… 7

インタビュー：タデウシュ・マゾヴィエツキ

われわれは話し合いを避けてはいない……………10

党中央委総会におけるヤルゼルスキ第一書記の結語演説

円卓会議：テーブルの周りのダンス……………12

「ポリティカ」紙による女子高校生とのインタビュー

黙せる大衆の獲得のために ヤツェク・クーロン……………16

編 集 後 記

☆今にも開催されそうだった円卓会議が延び延びになって、最近ではご破算になったときえ取り沙汰されています。「連帯」にたいして激しい敵意を持つとされるラコフスキが首相になり、また「連帯」の拠点中の拠点、レーニン造船所の閉鎖計画が発表されるなどの動きは、こうした見方を裏付けているようにも見えます。
 ☆しかし、「連帯」との対話を抜きにしてポーランドが現在の危機から脱出できるとも考えられません。8月末の党中央委総会におけるヤルゼルスキ第一書記の結語演説は、党が「連帯」をはじめとする党外勢力との対話の方向へと決定的に転換したことを示すものです。
 ☆毎日新聞が「破産状態にある経済を立て直すためには、ポーランド政府は反政府勢力と対話の場を持ち、経済改革に協力をとりつけるしか

方法がなくなっている」とするイギリスのポーランド問題専門家、A・ポロンスキ博士の見解を紹介していました(88年11月3日付朝刊)。同感なのですが……。

☆ともあれ、本号では「円卓会議」問題に関するいくつかの立場からの見解を紹介することにしました。いうまでもなく、「連帯」内部では「円卓会議」の是非やその展望をめぐって広範囲にわたる論争が繰り広げられています。いずれまた紹介したいと思っています。

☆「ポリティカ」紙のインタビューは、マヤコフスキー学院のポーランド語教室で教材として使ったものです。訳出にあたり教室の皆さんの協力を得ました。ありがとうございました。
 ☆資料延着のため日誌を作成できませんでした。このため、やや変則的な頁割となっていました。次号は1/2月合併号として年末刊の予定です。 1988年11月16日 (み)

今なぜ円卓会議か——ワレサは語る

Dlaczego podjąłem taką decyzję? Lech Wałęsa
"Solidarność" Biuletyn Informacyjny, nr.202, 12. 10. 88. et al.

チャンスは見逃せなかった

——ストを中止して円卓会議に参加するというあなたの決定は今なお多くの疑問や懸念を呼び起しているようだが、あなたもこれらの人々と同じ意見なのか？

その通りだ。私もそうした感じを抱いている。しかし、私は同時にこのチャンスを見逃したくなかっただけなのだ。とりわけ経済の面でできるだけ代償を少なくしてわれわれの目標を実現したかったのだ……そうした決定を下したことが正しかったかどうかを言うのはむづかしい。ストをもっと持ちこたえるべきであると信じている人々から厳しい批判があるのは知っていた。

——そうした批判的見解を抱いているのは、非常に厳しい生活条件に直面している青年労働者なのか？

必ずしもそうではない。異なる意見をもつ人々は私の友人の中にもいる。拘留を経験してきたこうした友人たちは、もはやいかなる合意をも信じていないのである。私も欺かれ、屈辱をなめさせられたので、かれらがどのように感じているかを理解できる。しかし、私はポーランドをもてあそぶことは拒否する。わが国はストライキを必要としない。われわれは闘っているが、自身を傷つけるために闘っているのではない。確かに、私は疑いをもっているが、それでもあらゆる機会を完全に追求し尽くしたいのである。だから手を差し出したのだ。だが私は誰も裏切らなかつたし、これから決して裏切らない。

——一部の批判は、あなたとキシチャク將軍の会談が秘密に包まれていたという事実から出ているのかも知れないが……

われわれは全般的な諸問題について討論した。將軍は多元主義がわが国にとっていかに不可欠であるかということ、さらには独立自治労組「連帯」の復権があらゆる合意のための絶対的必要条件であることを十分に認識していると思う。

——円卓会議の準備状況はどうか。一部の人はいらいらしているが……

ストが終わった今、われわれは民主的なやり方でこの過程を実施し、いっしょになって自らの準備を進めることができる。最良の決定に到達するためにはすべてのストライキ委員会およびそれ以外の組合機関を結集しなければならない。生活は妥協を必要としているが、それは許容できるものでなければならない。したがってわれわれはそのビジョンを作り上げなければならない。すべての議題および提案は十分に準備して円卓会議に提出しなければならない。

——もしヤルゼルスキ將軍に会ったら何と云うかと尋ねられてあなたは、「なぜこんなに遅くなったのか、でもこれからわれわれは失われた7年間を何と償うことができるだろう」と言うつもりだと答えた。とりわけ、対立と不信が生まれている時期にそれが可能だと思うか？

繰り返すが、それは分からない。しかし、私に分かるのは選択の余地がなく、このチャンスを利用せざるを得ないということである。われわれは協力して、ポーランドをヨーロッパの乞食の状態から救済し、若者に外国ではなくわが国の未来を

提供しなければならない。われわれがこれに早く着手できればできるほど、それだけ社会と権力側のそれに対する理解も広まり、われわれの問題を解決するチャンスもそれだけ大きくなる。それは単に失われた7年間を償うだけの問題ではなく、来るべき年月を無駄にしないためである。だから、私は再び欺かれないよう、そしてわれわれが最初から闘争に取り組みざるを得なくなるようなことがないように、祈るのである。



——将来の自分の役割についてはどう想像しているのか？

私にとってそのことは問題ではない。私のプランはこれまで掲げた理想についてのものであり、今後も私はそれを決して裏切らないだろう。独立自治労組「連帯」が存在しなければならない。唯一の問題は、それと引き換えにわれわれがどんな代償を払わなければならないかということだ。その合法化が早く実現すればするほど、その犠牲はそれだけ少なくなる。もちろん、それは8年前の組合をそのまま引き写したものとはならないかも知れない。今すぐにすべての問題に専念することはできない。多くの問題は専門家の手に委ねられるだろう。けれども、現時点においては独立自治労組「連帯」の復権が根本的に重要である（「グビアズダ・モージャ」第20号より）。

より賢明でよりすぐれた「連帯」に

ストに突入した炭坑労働者の第1の要求は独立自治労組「連帯」の合法化であった。この要求が実現されなければ、当局が行う改革、多元主義、市民的権利についてのそれ以外のすべての約束は空虚に聞こえるだろう。今日では単なる「連帯」の存在だけでは十分でないことは明白なのだとしてもである。政治制度のより根本的な変革と民主主義への移行が必要となっている。「連帯」はこの過程に貢献するつもりである。

いて盛んに語り始めている……一定の討論が行われることになっているのか？

……われわれは長い間会談の真剣な提案を待ってきた。あまりにも多くの時間、まったく多くのものが浪費されてきた。われわれは1980年8月の理想に戻らなければならない。戒厳令政策によってわれわれの問題は何ひとつとして解決されず、その間に経済は深淵にまで落ち込んできた。明らかに、幻想的な行動と偽りのイニシアチブの時期は終わった。示唆されている団体の複数制も必要だが、外見だけに終わる危険がある。1980年8月の理想に深く根を下ろし、これほど膨大な人々が忠誠を誓っている組織が非合法のままなのに、どんな複数制があり得よう。グダンスク造船所で私が述べた「「連帯」なくして自由なし」という言葉をもう1度繰り返そう。この名前と理念は1980年8月の出来事を覚えていない世代にとっても今なお有効である。造船所の青年労働者たちはさまざまな要求を起草したが、「連帯」としてストライキを終結した。あまりにも多くの人々の希望がこの名前と分かちがたく結びついているのでそれを簡単に忘れ去ることはできないのである。けれども、われわれが建設したいと考えている多元主義的社會においては、「連帯」の役割とその機能はまったく異なったものとなる。それは、新しい、より賢明で、よりすぐれた、より若い「連帯」となる（8月中旬、カトリック週刊紙「ティゴドニク・ポフシェフヌイ」とのインタビュー）。

〔以上2件、News Solidarność, No.120, 1-15 Oct.1988, から。訳：湯川 順夫〕

——当局は団体などの場合の複数制の可能性につ

冒険主義に走ってはならない

「より高次の必要性から、こうした決意が必要なのだ。私はポーランドを道具にして賭け事をするつもりはない。(…)冗談半分で行動してもいけないし、冒険主義に走ってもいけない。勝ちとらねばならないのだ! そう、より高次の必要性がそれを要求している。ポーランド人は殴り合ってはならない。ポーランド人なら国の困難な状況について話し合うべきなのだ。(…)いま、ポーランドは初めてチャンスをつかみかけている。それはまさに、これまでの積み重ねのたまものだ。

(…)どうか私にやらせてほしい。私は自分が神経質なのを承知している、もう十分やってきたのもわかっている。しかし、チャンスを目前にして立ち止まり、むざむざそのチャンスを失うことは許されない。そう、それはできないのだ。われわれみんなの経験から、そしてまた私自身の経験から、今ポーランドには真剣に話し合える可能性が実際に存在すると思う——われわれの将来について、何をなすべきかについて話し合える可能性が」(1988年9月4日、グダンスクの聖ブリギッダ教会前でのワレサの演説から)。

なぜ私はこの決定を下したのか

「われわれがこれまで、そのために開ってきた目標を達成しなければならない。その第1の要求は「連帯」〔の再合法化〕だ。戒厳令から7年、さほど大きな犠牲を払わずにこの要求を達成できる平和的な道へ向けてのチャンスが初めて存在している。しかしこの問題は複雑で、内部関係や外部関係もこみ入っている。こうしたことすべてを考慮に入れなければならない。私の計算では、この道しかない、これが最良の道だという結論が出た。ストライキの波はすでにしずまっている。わ



が国の現状から、経済損失は最小限にとどめなければならない。

当局がわれわれを今度もだましている可能性もないとはいえない。だが、これまでにも私や「連帯」は何度も何度も誹謗中傷を受けたが、それでもつねにわれわれは合意の可能性を求めて責任感をもって愛国的態度を示してきた。

円卓会議にはすべての社会勢力が参加できなければならない。もちろん、数10人が並ぶ円卓づく前に解決しなければならない最初の問題が「連帯」〔再合法化〕であるのは言うまでもない。「連帯」が組織として存在できるようにすることは不可欠であり、議論の余地のない問題である。1988年の「連帯」は7年前よりも賢くなければならない。いくつかのテーマは「連帯」よりも巧みにその問題を扱える他のグループにゆだねるべきだ——経済問題は専門の協会に、政治的テーマはそれを扱うための他の組織を作る道を探さなければならない。これらの専門団体が出来て活動を始めるまでは、「連帯」がすべてを担うほかはない。一方、もし「連帯」が労働組合のままだとどまろうとすれば、将来の展望というテーマについても一部は労働組合以外の別の人々に分担してもらう必要があるだろう。だがそれはまだまだ先の段階の話だ」(『週刊マゾフシェ』第262号、1988年9月7日)。

〔以上2件、Biuletyn Informacyjny, nr. 202, 12, 10, 88, から。訳：高橋 初子〕

「連帯」は要求する

ポーランドを正常な発展が可能なヨーロッパの一国として再建するために、多くの社会集団が要求する変化を実現させなければならない。現在は、こうした考えをひとつにまとめあげ、社会にこれを知らせるまたとない機会である。

1 社会が放棄してはならない最初の要求は「連帯」の合法化である。それは、包括的で真剣な対話の再開を可能とし、ポーランドが直面する多くの問題の妥協による解決を容易にする。さらに以下の要求が掲げられるべきである。

2 労働組合や協会、社会組織、財団などを設立する自由、こうした組織の活動の自由を保障すべきである。

3 地方議会を真の地方自治機関に変えるべきである。このために、それに適切な法的地位と権利を与え、市民集団や独立社会集団による候補者の推薦を可能とするよう選挙法を改めなければならない。

4 政治システムを経済システムから分離し、かつ何よりも企業経営幹部の選任にあたっては経営能力のみを基準とする方式を確立することによって、経済を再建しなければならない。

5 社会に対して情報の自由を保障すべきである。そのために検閲法を改正し、検閲の範囲を法律によって厳密に定められた特別な問題に限定し、科学や環境問題に関する刊行物の検閲を全面

的に廃止しなければならない。

6 学問研究の自由を全面的に保障すべきである。このために1982年教育法の復活が必要である。自治の原則にのっとった科学アカデミー法を制定すべきである。

7 わが国を今なお戒厳令状態下に置いている以下の法令を廃止すべきである。1985年のいわゆる「エピソード」法、内務省法、最高裁法、即決裁判法、法令順守のための閣僚会議委員会法。以上に代えて、司法の完全独立の原則にのっとり、警察力を公的コントロールの下に置き、警察の任務をもっぱら市民の利益の保護と社会悪との闘いに限定するような法令を制定しなければならない。

8 ポーランドが批准した国際的な協定と条約を国内法に統合すべきである。

9 国家予算を改め、教育、科学、文化、保健関係予算を大幅に増額すべきである。

10 住宅事情を大幅に改善しなければならない。このために、住宅建設融資銀行を設立し、住宅協同組合ではなく個人々に融資を行い、民間の住宅建設会社および建築資材会社に対する税金を免除すべきである。

11 都市と農村のあらゆる経済活動に平等な権利を認めるべきである。

12 環境破壊の進行を食い止めるための努力を強化し、原子力発電の是非について国民投票を実施すべきである。

〔グダンスク造船所の5月スト中にワレサ委員長が起草し、全国に提起了た討論文書。Bulletin d'Information, No.199, 31.8.88 訳：水谷 駿〕



円卓会議は何を実現できるか

インタビュー：タデウシュ・マゾヴィエツキ

Wobec propozycji okrągłego stołu : wywiad z Tadeuszem Mazowieckim
"Solidarność" Biuletyn Informacyjny, nr. 202, 12. 10. 88. Paryż

【編集部注】 グダンスク造船所閉鎖命令で円卓会議は座礁した感があるが、9月初めの時点で「連帯」側が円卓会議をどう見ていたかを示すインタビューを訳出する。タデウシュ・マゾヴィエツキはジャーナリストで1980年以後の「連帯」顧問、「連帯」合法期間中は「週刊連帯」編集長を務め、81年には「連帯」代表団とともに来日している。ワレサ委員長にきわめて近い存在であり、本年5月と8月の造船所ストの際も、ワレサ委員長と行動を共にする姿が見られた。このインタビューは1988年9月7日付の地下紙「週刊マゾフシェ」262号に掲載されたものである。

〔訳：高橋 初子〕

円卓会議はどんな会議になるのか

—まずフラシニウクの言葉で質問を始めたい。

「たくさんの方がまだ刑務所にぶちこまれていて、電話は止められたままで、僕はといえばストの最中と同じように監視されている、こんな状態で円卓会議を開いたとして、どんな会議になるんだ？」

それらの障害はまもなく解決されると思う。いまだに捕まったままの人たちすべては——セヴェリン・ヤヴォルスキも含めて——まもなく釈放されるだろう。もしそうならなかった場合は、円卓会議の冒頭、本題に入る前に、解雇者の復職問題や個人の身の安全の保証についての問題がすべて解決されなければならない。(…)

—円卓会議をどう思うか？ 個人的な見解をお聞きたい。

明らかに、第1番目の問題は「連帯」の再合法化と組合複数化だ。もしもこの問題で何らかの進展が見られれば、他の問題も進捗するだろう。だから私は、話し合いはこの問題から初め、これに集中的討議を行うべきだと考える。

—円卓会議がマスメディアで伝えられるような

多人数の集まりになるとすると、その席で組合複数制を議論するというのは想像しにくいのだが。

円卓会議の概念は非常に大ざっぱなものだ。会議の参加者構成について、これまでたびたび様々な説が流れた。だが、必ずしも円卓会議を50~60人が一堂に会する単なるショーで、実質的な会談は別のところで行われる、と捉えることはない。どんな場合にせよ、肝腎なのは話し合いが今年8月31日の時と似た構図で始まるべきだということ、すなわち「連帯」と当局が参加し教会代表が臨席するという形をとることだ。

—マスメディアは、将軍が各方面に手を差し述べて円卓会議を開くのであり、参加者も当局が選ぶ、という印象を与えようと努めているが。

会議の論題はポーランドにとって最も重要な多くの問題を含んでいる。だから、後から会議の構成員を拡充したり変化させたりすることは可能だし、むしろそれが必要だと思う。何よりも、最初の点を突破しなければならない。それさえすれば、当局側のイニシアチブだとか、招かれた人々の見解がどうか、といったことは別の問題だ。

—われわれの側の代表としては誰が交渉の場に加わると考えるか。

個人名をあげて言いたくはないが、ストライキ

の労働者代表、企業連合ストライキ委員会の代表、それに「連帯」代表としてふさわしい人々が参加しなければならない。

困難な決断を下したワレサ

——ワレサ委員長がスト中止の決断を下した後の雰囲気についてどう評価するか？ これについては様々な意見があり、ワレサに批判的な声も聞かれるが。

あれは非常に困難な決定だったし、もっと多くのことを望んでいた多数の人にしてみれば、いろいろ言いたくなるのもっともだ。しかし、あの決断をしたワレサには彼なりの論理があった。私が言ってもかまわないだろう。私は、彼が3つの要素を考慮したのだと思う。

まずひとつは、とにかく対話が実現したといえるわけで、これはきわめて重要な事実だ。7年間にわたってわれわれは対話の必要を主張してきた。しかしゴルバチョフがサハラフに電話をかけたと聞いても、ポーランドでは同じようなことは起きないだろうと思っていた。

次に、教会の公式代表であるイエジ・ドンブロフスキ司教の参加している場で、「(政労対話の)テーマにタブーはない」との明言がなされたこと。当局はこれで、円卓会議の議題から「連帯」問題を除外することができなくなった。

第3には、キシチャク将軍(内相)との会談後のレフ〔ワレサ〕の印象から、私には、当局側が何らかの合意が必要だと考えているように思われる。つまり、さもないと新たな騒ぎやストが起きると当局が認識しているということだ。ワレサはまた、当局側が権力機構内部に多大の問題を抱えているとの印象を受けたと言っている。こうしたことすべてから、彼は、この乱戦に一区切りつけて確実性のある試みをしなければならないと考えたのだ。

——シロンスクやシチェテンでは要求の大部分が労働者の抱える諸問題に関したもので、こうした様々な地域固有の問題は未解決のまま。だからこの両地方では、「連帯」復権のみを掲げたグダ



ンスクやスタロヴァヴェウラとは見方が違ってくるわけだが。

両地方の掲げた諸要求も円卓会議で話し合わねばならない、ただ少し後回しになるだけだ。というのも、それらの問題を最初にもってくれば、またも当局に一番重要な問題を先送りする口実を与えてしまう。

円卓会議の展望

——さほどわれわれに有益な形でないにせよ、とにかく円卓会議が行われたとして、その結果どうにか組合複数制をかちとれたと仮定しよう。そうしたらどうなるか？ また、もし組合複数制が認められなかった場合は？

私はこう考えている。現在は、わが国をより良い方向へ発展させるための扉がほんのわずかが開けられた状態だ。次はこれをもっと広く開かねばならない。問題解決のジェスチャーだけを作ろうとするこれまでの政策は終わったと思う。その政策では何ひとつもたらされなかった。かわりに、内実をともなった問題解決をめざす政治思考をしよとうとの意思があらわれるかどうかがキーポイントだ。当局は——少なくとも当局の一部は——、これ以上このままではいられないとの意識をある程度持っている。これが見せかけだけに終わるか、それとも真の変化につながるか、その答えはこの

先数週間の事実が決めることになろう。しかし、当局にすでにわれわれの根本的要求を容れて「連帯」を認める用意があると考えるほど私は楽天的ではない。この問題をめぐって激しい攻防が行われよう。ただ個人的には、もしこの方向での解決の糸口がつかめれば、民主化や経済改革などの明るい展望を開く強力な誘因になるだろうと考えている。

見せかけの試みではなく、真剣な試みが行われねばならない——あまたの逃げ口上を避けるために。しかしまた優柔不断でもいけないし、「連帯」と名のついた組織が許されればそれだけで満足するといった安易な態度でもいけない。もちろん、このような真剣な試みは、——最初の会合で見解の一致ができあがりでもしない限り——一度きりで終わるわけにはゆかず、何度も話し合いを重ねることになろう。

もし会議が何の成果も生まなかった場合は、残念ながらポーランドにとって極めて不幸な事態になろう。膠着状態への逆戻りだ。われわれはみな、それだけは避けたいと思っている。なぜなら、そうになったら、次の紛争はさらに深刻で、さらに解決しにくいものになるだろうからだ。

——楽観的な展望の方に現実が向かったと仮定しよう。その場合、われわれは自らの責任においてかなりの犠牲を払うことになる、その犠牲がポーランド（の事態改善）のために必要不可欠なのだ、とよく言われる。この図式には大きな危険が含まれている。

私もそれには気付いている。その選択肢のうちひとつの要素はさらに暗い——というのも、それは絶望と無力感と紙一重だからだ。こういう混乱状態ですれしも希望が持てなくなり始めている。この状態がさらに続くことになれば……。現在すでに何かが真に変わり始めている、と言い切ることは私にはできない。しかし、あるチャンスが現れたとは言えるだろう。チャンスなどないと考えている人々は、新たな抗議の波が起きると信じており、その時ふたたびすべてを聞き取るのだと言っている。そうなのか、どうか。私にはわからない。当局との対話自体に反対している者もある。レフの決断はまさにこの点で大きな危険をはらんでいた。しかしすでに決断は下された。これから厳しい闘いが始まる。今われわれに必要なのは団結だ。



ワレサ家の手織アリギッタ・カタジナの洗礼式にて、左からマンウ・エツキ、ワレサ、ワレサ夫人。（一九八六年一月六日）

われわれは話し合いを避けてはいない

党中央委総会におけるヤルゼルスキ第一書記の結語演説 1988年8月28日

General Jaruzelski's Closing Address at the Central Committee Plenum, 28 Aug. 1988
Uncensored Poland News Bulletin, no. 16-17/88, 10 Sep. 1988

【編集部注】 ポーランド各地がストに揺れていた8月26日、キシチャク内相が「対話の用意がある」と公式に声明、その後の政労会談への道を開いたが、その2日後、統一労働者党中央委総会でヤルゼルスキ第一書記が行った締めくくりの演説を紹介する。すでに日本の一部報道機関でも伝えられたように、ふだん個人的なことをめつたに話さないとと言われるヤルゼルスキが、この演説の冒頭で「個人的な感想」として「いくたびか重大な決定がこの場所で下されたが、(…)中には時の試練に勝てなかった決定もある(…)」と述べ、観測筋では辞任の前触れではないかとささやかれた。演説全体の内容も、党の役割を厳しく見つめ、協調路線を強調しており、「法を尊重する相手」との限定条件をつけながらも、「反対派」との対話を明言して、ワレサーキシチャク会談や円卓会議へ向けた方向づけを行っている点で、転機を画する演説といえよう。その後の政府の対応(レーニン造船所閉鎖命令など)は必ずしもこの路線にそっていると考えにくい、今後の展開が注目される。

第8回総会も終了に近づいた。党政治局はウワディスワフ・バカ、ユゼフ・チレク両同志によってなされた報告の中で、現状の問題分析と今後の行動へ向けての方向づけを概説した。(…)この場所で、歴史的な重要性を持つ決定がいくたびも下された。だが、われわれのなかでも古参の党員は、中には時の試練に勝てなかった決定もあることを知っている。しかし第8回総会は必ずや、党の任務の新しいスタイル、人民の苦悩への党の緊密な対応、党の確固たる見解と現実的ビジョンを証明するものとして残るだろう。

議論においては、相反する意見も聞かれた。過去であれば、そうした対立は単純化された判断や公式に従って決着をつけられたことであろうが、現在のわれわれは違った見方をしている。(…)

労働者の抗議は、一般には経済・社会状況に由来している。この抗議はまた、当局の犯した過ちや、労働者階級との絆の弱体化、労働者の抱える諸問題に党が(十分)敏感でないことなどを示すシグナルでもある。(…)

ストライキ労働者の要求をすべて認めよと主張する者もあれば、当局はなぜ法の支配を取り戻す

ために必要な処置をとらないのだと問う者もある。これはどちらも正しい道ではない。長期的に見れば、わが国の国内問題はストライキによっても、またストの強制的鎮圧によっても、解決できない。もしも社会主義国家の安定と安全がおびやかされることがあれば、われわれは法により定められた手段を取ることにやぶさかではない。この点については全く疑いはない。しかし、当局は性急にそうした手段に訴えはしないし、そうしてはならない。(…)

政府の社会・経済政策の成果を評価するにあたっては、これまでわれわれが政府の政策評価において十分な一貫性を欠いていた点を強調せねばならない。党は行政的引き回しのやり方を放棄した際に、経済の分野における党の役割と影響力を行使する政治的手段を十全に規定することに失敗した。(…)

中央委員会総会で政府を批判するというのは、これまでの党の慣例にはなかったことである。通例、批判は「内輪で」なされるのが常であった。われわれはこの慣習と訣別した。党は労働者階級の歴史的利益および現在の利益を代表する政治勢

力であるが、「影の内閣」ではないし、そう
なつてはならない。(…)政府への鋭い批判は事
実であり、多くの面で正当性を有している。

党とその中央委員会は、代議機関の政策決定
権を代行するつもりはない。いかなる変化も、法
に従い、同盟と協力の原則にのっとってなされね
ばならない。(…)

国民的協調という広い基盤に立った権力行使
システムの基礎作りに向け、適切な条件がすみや
かにポーランドで整うことをわれわれは望んで
いる。現在の同盟と協力の路線を、憲法に従つて
協働する用意のある多くの運動体、団体、個人
により補充してゆくことが可能である。この新し
い形態に含まれる範囲については、まだ問題が残
っている。しかし、そこにはひとつの不可侵の境
界線がおのずから存在する。それは社会主義的性
格と、わが国の発展という点である。

また、わが社会主義的議院に第二院を設ける
という案も日程にのほっている。この問題はま
だ決断に至っていないが、この考えを実行に移
す障害はなにも存在しない。(…)

このことは、さらに多くの協会や団体の登
録〔合法として認知すること〕、およびそのた
めの新しい法律の採択により、促進されるだろ
う。第7回総会から現在までに、約30の協会
団体が登録されたことは強調に値する。

社会主義的刷新の大きな成果のひとつは、
労働組合が真に独立した、自らの声で力強く
語る存在になったことである。彼らは独自の
見解と提案を持ち、その意見はしばしば国家
や経済当局のそれとは反対であることもある。
私は強く言いたい、これは貴重な特質であ
り、彼らが責任感さえしっかり持っていれば、
決して不都合な要素などではない。

党は、労働組合をより強くかつ有効なもの
にし、「早期警報システム」を改善するために役
立つあらゆる動きを支持する。しかし、党は、
労働者階級の団結を阻害し、企業内に政治
闘争の要素を持ち込もうとする提案には反
対である。遠い昔から最近までのわれわれ
の一連の経験は、この反対の正当性を証し
ている。今ふたたび、われわれは労働者の
分裂が何を意味し、どんな危険をはらんで



ヤ
九
七
九
十
一
番
記

いるのか理解しつつある。

われわれのこの立場はドグマ的強迫観念によ
って選り取られたものではなく、国と国民と経済
の共同体全体の関心を反映した結果生じたもので
ある。だからわれわれはこう言う。「責任なくし
て自由はありえない」。

しかし、労働組合運動の組織形態を拡充しよ
うとする様々な提案は、検討に値する。これにつ
いては、アルフレド・ミオドヴィチ同志〔官制労働
議長〕が本総会で報告した。

国民的合意は、それ自身が目的ではなく、
目的にむかう正しい道筋であるにすぎない。そし
て、目的はただひとつ——ポーランドの幸福、ポ
ーランドの明るい未来の実現である。

チェスワフ・キシチャク将軍が表明した円卓
会談の構想は対話の実現に貢献する。

「反対派」という用語をより深く解釈すべき時
が来ている。建設的反対派と破壊的反対派とい
う単純明快で論理的な分類をしてはいけないのか
？ 前者はポーランドのために役立ちうる、後者
は取り返しのつかない損害を与える。

法の支配のみが、あらゆる協定、合意、同盟
の基盤となりうる。われわれはその形態と、国家
当局者による法の支配の尊重について話し合いを
避けるつもりはない。同時にわれわれは、すべて
の運動体および社会政治勢力に対しても、現行法
にのっとって行動することを求める。もしも法律
が発展を妨げるようであれば、法を改正すべきで
ある。誰も法を破ることは許されない。

〔訳：高橋 初子〕

円卓会議：テーブルの周りのダンス

『ポリティカ』紙による女子高校生とのインタビュー

Taniec przy Stole, Rozmowa z Katarzyną Flasińską
Polityka, Nr.42, 15 X 1988

【編集部注】 以下に紹介するのは、公式週刊紙『ポリティカ』の1988年10月15日号に掲載された「円卓会議」問題に関する女子高校生とのインタビューである。この女子高校生は、名前をカタジナ・フラシンスカといい、ワルシャワの東南100kmの位置にあるプーヴィという町の国民教育委員会記念普通高校4年生である。これは日本の高校の3年生に相当する。「ポリティカ」紙は、統一労働者党の1機関が発行する知識人向け週刊紙で、公式新聞ながら1958年の創刊以来、相対的にリベラルな論調で知られる。現首相ミエチスワフ・ラコフスキが創刊以来1981年まで編集長を務めていた。

〔訳：Majako〕

—「円卓会議」という考えを知っていますか。

知っています。

—それで？

そのような「会議」は40年前に開かれるべきだったと思います。

—どうして？

1948年頃に、実質的で参加者の平等の原則に基いた合意が成立していたならば、その後の何度かの「歴史の曲り角」はなかったでしょう。

—すると、主としてスターリニズムの影響下に形成された当時の条件の下においても、そのような協定は十分安定したものでありえたと考えるわけですね？

それはわかりません。実際、誰にもわからないのではないですか。要するに、そんな試みはなかったのです。でもたとえばスターリニズムに抵抗したユーゴスラヴィアではそれはありました。

何のための円卓会議か

—「円卓会議」に関する議論に注目していますか？

あんまりね。だってとても退屈ですもの。決まり文句の繰り返しで、そこからは何も出て来ないでしょう。「円卓会議」によって誰が何をしようというのか、全然はっきりしていません。白状し

ますが、私にとってはあまりおもしろい話ではありません。同世代のみんなもそう思っています。大人だって多くが懐疑的に構えているでしょう。

—なぜ、そう確信するのです？

はっきりいって、暮らしてはますます悪くなっているし、誰も事態の好転など信じていません。人々は目に見えて貧しくなっています。猛烈な物価高だし、お鍋の中に入れるものが何もない人たちがいます。こんな状況の下で、「円卓会議」によって何かが好転するなんて信じられますか？ その「円卓」の周りで皆が肩を抱き合うなんて考えられません。むしろそれぞれが、自分こそが最もたくさん取ろうとして腕をつっぱり合い、他人を出し抜こうとすることでしょ。

—でも、政治体制の変革の必然性について、政治権力の自己規制の必要性について、立法府や行政府における社会の（その多様性をそのまま認めた上で）より広範囲な代表参加について語られています。こうした傾向は若者の関心をひくに値しないのでしょうか？

すべては、そうした傾向がいかに永続的なものであるかにかかっています。そこから、何か具体的なものが出てくるかです。たとえば、社会科学入門のカリキュラムでは、いつも資本主義に対する社会主義経済のすでに立証済みの優越性について語られています。誰も心の中ではあざ笑っている

くせに、授業では計画経済がいかに優越しているか、等々のばか話が、石のような権威をもってまくし立てられます。私の考えでは、政治体制がいかなる名称で呼ばれようが、それはまったく重要ではありません。重要なのは、政治制度が立派で、公正で、何よりも約束を実現できるものであることです。旗に書き記されたことを、普通の日常の中で起こっていることに何とかして近づけることです。数年のうちにゴミ箱に投げ捨てられることがないよう、何か永続的な価値を持つことです。ところが、政府が交替することに、それまでのことが全面的に批判されます。新しい指導者が登場するごとに、それまでの指導者は何の役にもたなくなってしまう。すべてのポーランド人が何か永続的な価値を必要としていると思うのです。

体制の変革ということについて言うならば、それはその中で生活しなければならない人々の必要を満たすものでなければならず、その逆であってはなりません。体制ではなく、国民の役にたつものでなければなりません。

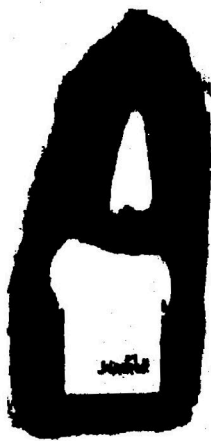
満たされない若者たち

——若者たちは自分が何を望んでいるのかを知らない、とよく言われます。何か望みがあっても、それは西側に出ることだったりして。

若者はそんなに大それたことを望んでいるわけではありません。たとえば私は、自分が勉強してきた仕事に就け、合法的に稼いだお金で基本的な生活必需品が買え、文化的必要を充足でき、そして社会に出てすぐ住宅が手に入ることを望んでいます。これは何も法外な要求ではなく、各人が必要とするごく普通の保障です。若者たちが国内でこうしたものを手に入れられなくて外国へ行きかかるとしても、何も驚く必要はありません。

——このような傾向を押しとどめる現実的可能性が存在すると思いますか？

あると思います。若者たちのために、彼らの人生についての考え方が実現される可能性を、彼らが妨害されない可能性を作りださなければなりません。たとえば、アグロテフニカ社の若者たちは、



西側に出て行かなくともポーランドでたくさん稼げることを示しました。しかしこの実験は、現実との衝突に耐えられませんでした。本当のところ、結局、この会社の「誤り」がどこにあるかわからないのです。もうひとつの問題は住宅建設です。青年住宅協同組合のある若者を知っています。彼は27歳にしてもう心筋梗塞をわずらいました。住宅建設の手続きと障害について話されることが全然理解できなかったのです。さらに——若い夫婦に対するローンの問題があります。大騒ぎになっています。だって30万ズウォティに引き上げられたのです。70年代末には15万ズウォティだったのが。でも、公式のインフレ指数に比べてさえこれがどんな低い値かを計算するためには、数学で「可」をとってればそれで十分でしょう。

質問に戻りましょう。若者たちが何かというところすぐ処罰されるようなことがなく、愛国心の不足と貧欲さを非難されず、たとえば株式会社を設立する可能性やあるいは西側に出る機会が与えられていたとすれば（ユーゴスラヴィアがそうであるように）、状況は変わっていたでしょう。今より健全だったはずです。



われわれはいつも
世論に耳を傾ける

そして常に世論の
反対の道をゆく

高給とりの鉱山労働者の問題

—「普通の」企業や工場、製鉄所、鉱山には彼らの居場所があるとは考えないのですか。株式会社の設立が西側に出るかしかないのですか？

わが国にも労働市場のようなものがあるのだとすれば、これこれの仕事の方が良いというような話はありません。その人により多くのお金、あるいはより多くの満足を与えるものの方が良い仕事です。最も良いのは両方と与えてくれる仕事でしょう。鉱山での仕事はお金をたくさん与えてくれますが、このような重労働に満足を感じる人がいるとは思えません。別の問題もあります。以前に読んだことがあります、わが国では鉱山はそんなにもうかる産業ではない——あえて言わせてもらいますが——ということです。たとえば、ルブリンの鉱山は巨額の損失——去年の場合だと65億ズウォティ——を出しながらも、そこで働く人は鉱山の中でも最高給をとっています。『クリエル・ルベルスキ』紙がそう書いていました。何かまったくおかしいのではないのでしょうか。

自分の給料が自分の仕事の成果と無関係であることを自覚している鉱山労働者はどんな気持ちでしょう？ 要するに働いていればそれで給料は支払われるのでしょうか？ 仕事が経済的に大きな成果を上げているからこそ給料が支払われるのではないのでしょうか？

—労働の問題に関するあなたの考えは、もっぱら新聞を読んだ結果ですか、それとも自分で仕事に接する機会があったのですか？ 自分で働いたことがありますか？

労働に関する私の経験は、志願労働隊で過ごした3週間に限定されます。3週間の骨の折れる良心的な労働に対して、私は昨年、4000ズウォティを手に入れました。このような誤りはもう2度と犯さないつもりです。

勉強は無料、医療も？

—あなたはどの先何をした？ どんな職業を選びますか。

建築学が私の夢です。それは、数学的・技術的素養とヒューマンイズムの素養を結びつけます。

—そんなに満足させてくれますか？

自分の町の建築様式を見ていると気分が悪くなります。でも実際には、このような醜態のすべてが建築家のせいだと言うほど、私はナイーブではありません。彼らには、原材料や技術、長い「伝統」などの制約があります。最終的には彼らは、外国でのコンクールに入選することに生きがいを見つけることができます。これは国内ではめったに行われません。良いコネを持ち、興味深い注文を受けているエリートもいます。しかし一般的には、退屈で、ぞんざいで、紋切型の仕事が多い。——どうして、あなたは八百屋をやらないのですか？

やりたくないからです。八百屋の方がヤギエウォ大学の学位に勝るといってであっても、むしろそれはよく考えてみる理由とはなっても、自分の生き方に関係することではありません。

—あなたは、どちらかといえば非常に「難関」を専攻に選んでいる。成功するためにはどうしますか？

「難関」とはどういう意味なのか知らない、と言っておきましょう。答はこうです—勉強します。

—個人授業を受けていますか？

受けています。製図法の。最も多数の志願者がここで不合格になります。1時間のレッスン料が1500ズウォティですが、これは法外な値段ではありません。ワルシャワではこの2倍、あるいはそれ以上になります。勉強にはお金がかかるのです。

—だけど、わが国では勉強は無料だが……。

……医療もそのはずですね。

—どうしてそんなに悲観的な？ あなたの人生経験は、おそらくそんなに苦痛に満ちた、苦しいものではないでしょう。

悲観的であるわけではありません。そう見えるとしても—慎重な現実主義者なのです。ものごとをありのままに見るの。

権威不在の時代

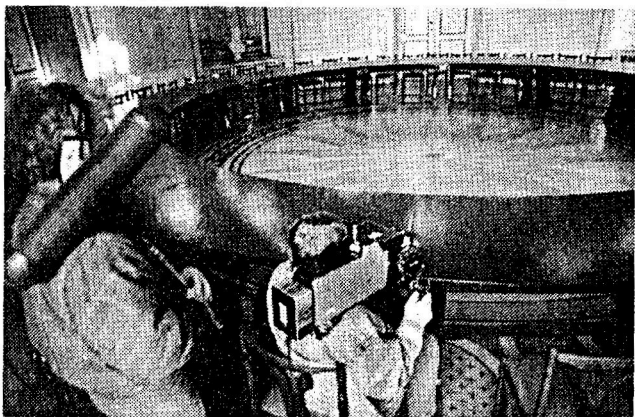
—そのような「現実主義」からの脱出を可能とするためには、ポーランド人には何が1番必要だ

と思いますか？

信頼できる権威。われわれはそのような権威不在の時代に生きています。政府には間違いなく権威はありません。それに「連帯」も今日では若者にとっては「わかりにくい」存在です。彼らは1980年にはまだ7歳か8歳でした。ある意味で教会の権威について語るができるかもしれませんが。でも、生活水準やインフレについて最終的決定を下すのは教会ではありません。誰も誰をも信じていません。これがわれわれの問題なのです。このことが「テーブル」のまわりでいつまでも続くダンスの中にも見てとれます。まだ席についていないのに、もう山ほどの疑問、留保、前提条件……。

—つまり、この「円卓会議」は頭からダメである？

ご冗談を。誰も聞く相手のいない真空の中で話して、ごだまを待つことによって、意見の一致がどうして可能でしょうか？ 対話とは、誰かに話しかけ、相手の話を傾聴することでなければなりません。そこから始めなければなりません。何が話され、何が聞き入れられるのか、それはもう別の問題です。



円卓会議のための円卓がワルシャワ郊外ヤフウォナ宮殿に設置され、報道陣に公開された。

黙せる大衆の獲得のために

ヤツェク・クーロン

To Win the Silent Majority, Jacek Kuroń

Uncensored Poland News Bulletin, No.12/88, 1 July 1988

【編集部注】 以下は、「連帯」の中心的イデオログの1人、ヤツェク・クーロンが今年の4/5月ストを総括して今後を展望した論文で、地下紙「週刊マゾフシェ」第252号、1988年5月25日付、に発表された。政府当局は、このような立場のクーロンが「連帯」側代表の1人として円卓会議に参加することを拒否しており、このことがひとつの原因となってその開催が遅れている。〔訳：水谷 駿〕

4/5月闘争の背後にあった社会的、政治的状況は、一方において政府が進める改革の失敗と経済および国の破壊の進行、他方において経験に発する、さらにいうならば歴史的経験に発する社会の態度によって特徴付けられる。社会の態度とは、ひとつは物価上昇に対する果てしのない競争と不安の中に投げ込まれて、繰り返される失望に深い無力感によって対応するしかない黙せる大衆のそれであり、もうひとつはそれほどの挫折感はなく、それゆえにむしろ攻撃的な、政治的に積極的な少数派のそれである。この積極的な少数派——1年前、私はその数を全国民の20~25%と推計した——はかなり数を増しているように見える。主として、成人に達したばかりの若い世代の間で政治的に積極的な者の比率が異例に高まっているためである。黙せる大衆の無力感は、少なくともその1部は、ポーランドの争いが解決される可能性が現在はないという、きわめて一般的な確信に起因する。自由の16か月間の経験は、いかに不可欠な条件であれ、当局による「連帯」その他の独立組織の承認だけでは経済改革と国民的再生の実現のためにはもはや十分ではない、ということを見せているように見える。必要とされているのは、広汎な国民的支持を得た政府、あるいは少な

くとも広範囲にわたる真の連立の体制である。

これに類似した何ものかを現在の支配者から引き出すことが可能だろうか？ ソ連で現在進行中の解体の過程は、実際、そうした可能性を作り出すかもしれない。現在においてさえゴルバチョフは、ポーランドにおける平和の代償としてこれを認める用意があるだろう。そのために政府当局に1980年8月にも比すべき圧力をかけることが必要である。かつて私が述べたように（「何かが起こる前に」。本誌1988年7月号所収）、ゼネストの現実的脅威だけで十分である、といった状況が来るかもしれない。しかしながら、この脅威が現実となるためには、そしてありうる展開のすべてに備えておくためには、われわれはまず黙せる大衆の無力感を克服しなければならない。無力感は現に生じるおそれのある制御不可能な爆発の温床であり、われわれは皆、そのような制御されない爆発が当局に対する圧力手段としては役に立ちえないことを知っている。いずれにせよ、それが効果的であるとは考えられない。無力感の克服は、多大の時間を要する長い過程とならざるをえない。1年前の私は、これを実現する道は産業企業の内部と地域レベルで民主主義を確立することだと考えていた。ところが、政府当局はこの道を閉ざし、このことによって私の誤りを明らかにした。政治の世界においては、自分の処方箋にあまり固執し続けなことが重要である。現在探るべき道は、上述の論文で明らかにしたとおり、黙せる大衆の要求を、さらには彼らの賃上げ要求のストを支持することによって、彼らを獲得することである。

賃上げ要求か、政治的要求か？

それゆえに、4月23日のピドゴシチの運輸労働

者のストライキが勝利に終わった時、私はこれを黙せる大衆の態度を徐々に変えて行くであろう過程が始まる第1歩と見た。あのストライキは、官製新労組のメンバーが指導した。それゆえに人々はあまり不安を抱かず、広い支持が得られたのである。数日後、この黙せる大衆は、息をひそめてノヴァフタのストライキを見守っていた。このストライキの帰結がさらにストライキが続くか否かを決めようとしていた。他の人々といっしょに、私は歴史のアナロジーでもって考えようとした。賃上げ要求のストライキは、1980年7月がそうだったように、徐々に政治的ストライキに発展してゆくものである。ワレサをはじめ他の「連帯」指導者も同じように考えていると、私は確信する。

「連帯」指導部の方針 — グダンスクのレーニン造船所がストに入る〔本年5月2日〕前にワレサと「連帯」全国執行委員会が声明した〔本誌6月号7頁に邦訳〕とおり — はこうだった。実質賃金の防衛のためのストライキは支持されるべきであり、職場の「連帯」組織はその組織化を援助すべきである；しかしながら賃上げは問題の解決とはならない；ゆえに政治的な解決が必要である。そこで「連帯」はストライキは呼びかけなかったが、自然発生的な行動に対しては支持を表明し、同時に当面の成功を超えて追求すべき目標を示したのであった。この方針は政治的に積極的な少数派、とりわけ1980年8月の記憶によって鼓舞され、真に闘うに値するものは政治的解決であることを完全に理解している若者たちの支持を獲得した。その結果が、学生の抗議行動と抗議ストの波だった。各地域、各工場の「連帯」活動家たちはストライキを政治的なものにならんと試み（ウッチ地方委員会の声明を参照）、下シロンスクのW・フラシニェクはこうした線に従ってふたつのストライキを組織することに成功した。しかしこのストライキは、明らかに彼の期待に反して、もっぱら賃上げにしか関心を示さず、ごく短期間しか続かなかった。

当局の対応は自殺的というしかなかった。賃上げは認められたが、ストライキ委員会との交渉は拒否したのである。その結果、連鎖反応を絶つはずの合意の可能性がないまま賃上げ要求のストが拡大



ヤツェク・クーロン

した。ノヴァフタでは官製新労組に対して賃上げが通告された。このストライキのごく限定的な成功でさえ全国に影響することを考えて、当地のストライキ委員会はこの賃上げ提案を受け入れるべきだったのだ。

5月2日、造船所の青年労働者たちが「連帯」の復権を要求し純粋に政治的なストライキを組織することに成功した。ストライキはグダンスクに限定されていたが、ここは、歴史が繰り返されようとしているという期待を抱かせるに十分な場所だった。このことは、積極的少数派を鼓舞するものではあったが、しかしどちらかといえば食糧不足と12月13日の衝撃しか記憶にない黙せる大衆にとっては不安の種となった。当局側もまたパニックに襲われた。彼らは考えることをやめ、やみくもに行動を開始した。幸いなことに、中核部の一部に冷静を失わない人がいて、おそらくはこのために調停の努力が始まった。だが、パニックはあまりにも大き過ぎた。このために、ノヴァフタの製鉄所1カ所に限ってだが、12月13日を再演することが決定された。黙せる大衆にとっては、これは過去の苦い経験を再確認させるに十分であった。ストライキはそれ以上拡がらなかった。

全国委員会だけでなく、青年労働者たちと百戦錬磨の「連帯」活動家たちも孤立したグダンスクの造船所を支持する連帯ストを起そうとしたが、何をもってしても黙せる大衆を動かすことは

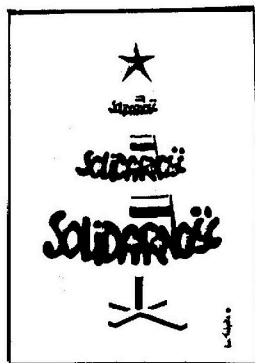
できなかった。ウルススの青年たちだけが部分的ながら成功を収めたが、しかし他の労働者の支持をほとんど得ることができず、わずか1日で妥協を受け入れてストを中止しなければならなかった。各地域の「連帯」組織は動けなかった。指導部の大半が逮捕されるか、地下に隠れていたからである。行動の時は終って証人となるべき時が来たことを知ったフレサは、他の労働者と共に造船所内に立てこもった。火曜日まで待った彼らは、何も起きなかったことを見届け、賃上げを要求することもなく名誉ある退出を演出した。

要するに私が指摘したいのは、政治的に積極的な少数派が社会の空気を考慮に入れなかったこと、そのために十分な支持者を獲得できなかったことである。だが、彼らを非難しようというのではない。われわれが成果をあげた（しかも現時点では相当な）ことを、そしてたとえわれわれが賃上げストに限定していたとしても必ずしももっと大きな成果が得られたとは決して言い切れないことを私は知っている。だが、将来に向けて結論を引き出すためには、別の道も考慮されなければならない。

どこに問題があったのか

われわれは「連帯」の復権を勝ち取れなかった。さらに悪いことにはアグンスク造船所を孤立させてしまった。そこで今、「連帯」内部では、原因究明の議論が盛んである。これについて立ち入って検討しなければならない。スケープゴートが見付かる時は、無力感にさいなまれなくともすむことが多い。

第1に、あれはすべて挑発だったというもったいぶった議論がある。この理論の信奉者はたったひとつのストライキでも実際に組織しようと試みたことのない人々である。これを試みたことのある人なら誰でも、たったひとつの工場においてさえ考慮すべきファクターが無数にあり、しかも成功は決して確実ではないことをよく知っている。全国の無数の工場で、共産主義者がストライキを挑発できるなどと信じられるだろうか。そのような挑発はいったい何を目的としているのか。



急進派は、「連帯」指導部は実際にはストライキを呼びかけなかったと主張する。実際になされたこの種の呼びかけ——ピラマキや説得、職場放棄の試みなどによる——が、結局はほとんど反応を得られなかったことには全然触れずに。理論家たちは、「連帯」指導部が真に独創的な目的の宣言をなすべきだったのだと主張する。「連帯」の復権ではもはや十分ではないというのだ。これはそのとおりである。私自身、外国のポラード語放送とのインタビューで、連立政府の要求を出した。このことで私はプロニスワフ・ゲレメクから厳しく叱責された。私の個人的な主張であるにもかかわらず、政府がこれを「連帯」指導部の公式の主張ととるかもしれないことを、彼は恐れたのである。ゲレメク教授は、この提案が当局と黙せる大衆の双方を驚かし、その結果運動のブレーキとなると考えたのだ。確かに、主張は正しければそれでよいというものではない。正しい主張はそれにふさわしい時を待たなければならないのだ。

実際の精神の持主は、「連帯」がその組織構造をそんなにも早く解体されるがままに任せたことにショックを受けた。これも事実である。皮肉なことに、この種の批判は、運動の厳格な秘密主義を主張する人たちから聞こえてくる。「そうならないように」と彼らが主張していたまさにその時に、秘密組織は公然と登場することに失敗したのだ。11カ所のストライキ（ビドゴシチは除い

て)のうち7カ所は、公然組織である「連帯」設立委員会が存在する企業で起こったことは重要である。そこには、ストライキが明らかに計画的に実施されたただ2つの場所であるウルススとスタロヴァヴォラが含まれる。組織構造は運動の上に育つものであり、運動がなければ組織構造も死ぬことを忘れてはならない。運動の可能性が非常に限定されている以上、われわれの組織構造が弱体であるとしても何ら不思議はない。

次の1歩

「すべてかゼロか」の理論の信奉者とは違って、私はわれわれが敗北を喫したのではないと主張したい。わが国のような状況の下では、ストライキの結果として勝ち取られたあらゆる譲歩が、それ自体いかにささやかなものであれ——たとえばストライキ委員会の事実上の承認や報復をしないことの約束など——1歩前進をなすのである。こうした譲歩が11カ所の重要な工業地帯で勝ち取られた。さらに重要なことは、闘いの過程で多数の青年労働者が公然と「連帯」の隊列に加わり、また学生との間に生きた同盟関係が樹立されたことである。私はかねてから、われわれが青年たちを引きつけられないでいることに不満だった。ところが今や、彼らは自分で「連帯」への道を見付けたのである。グダンスクの造船所では、シャブレフスキ〔60歳代の古参活動家。5月スト委員長を務めた〕とワレサの名前の交差は、各世代間の統一のシンボルである。これは将来のために非常に重要である。

さらに、グダンスク造船所が孤立して闘わねばならなかった事実が、多数のポーランド人の良心に重くのしかかるものとして残ると思われる。1968年3月後の労働者のやましい気持ちと、1970年12月後の学生のやましい気持ちとが、それぞれKORと「連帯」の生みの親となったことを想起したいと思う。明らかに、自責の念は社会的意識の形成において強力なファクターとなるのである。

私の議論の目的は、労働組合にとってであれ政党にとってであれ、現実の社会的な諸傾向を促進

する、あるいは社会的な意識を形成する——これにとって代るのではなく——以上に望ましい社会的運動の行動方法はない、ということに関係者のすべてに説得するにある。レシエク・モチュルスキ〔急進的民族主義的傾向の反対派、ポーランド独立連盟の指導者〕は、勇気を欠く者のための綱領を作っていると私を非難する。たしかに、積極的少数派が社会の残りの部分に対し優位を占めた例を歴史は多数知っている。しかし民主主義を求める運動は、社会に対する権力を握ることに関心はなく、むしろ社会の権力への参加を実現しようとする。この闘いにおいては、勇気ある者は勇気を欠く者と協力しなければならず、多数者のことを考慮に入れ、彼らこそが偉大な事業を達成できる力であることを信じなければならない。事実の問題として、このような闘いのための条件はいま、過去40年間のどの時よりも有利である。

私は、民主主義的な組織を作ることによって建設的な行動をしたい、と考えている。これは不可能ではなかろう。政府当局は、内外からの圧力によって、まだその針路を変更しよう。さしあたりは、行動の道は物質的要求を支持することである。工場で「連帯」活動家は労働者に指導力を発揮しなければならない。その方法のひとつが「連帯」設立委員会を作ることである。もうひとつが近く行われる地方議会選挙のボイコットである。勇気ある者が運動を行い、勇気に欠ける者はただ投票を差し控えるだけでよい。この方が危険は小さい。積極的少数派が偉大な目的は小さな1歩1歩によって達成されることを理解し、黙せる大衆が小さな1歩1歩が救いの道であることを理解するにいたる時、われわれは確信をもって未来について語ることができる。





発行所・ポーランド資料センター

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一國ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

事務所は月・水・金 14:00~17:00

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)